

藤原忠晟『百首』影印と翻刻・解題

福田 智子

一 はじめに

外題・内題もない本書は、「寶曆十年秋 藤原忠晟」という奥書をもつ百首歌である。『新編国歌大観』を検する限り重複する歌はなく、また、二万九千首余りの歌を収める『類題和歌集』（研究叢書_上）、日下幸男編、和泉書院、二〇一〇年十二月）にも同じ歌は見当たらない。

とはいえ、近世の百首歌については、まだ知られていないものが少なからず現存することが想定され、本書もその中の一書に過ぎないが、本百首歌の題が、おおむね宝治百首題に一致すること、宝曆十年（一七六〇）秋という年代が明記されていることなどから、宝治百首の近世における享受の一端を垣間見る史料にはなり得よう。

そこで、本書を仮に、藤原忠晟『百首』（以下、「忠晟百首」

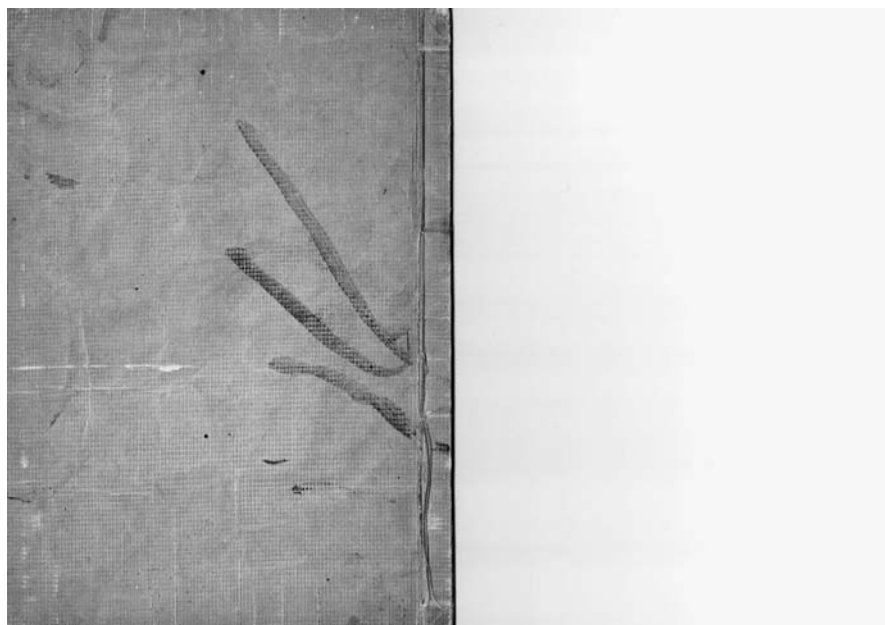
と略す。）と称し、ここに紹介する。

二 書誌

本書は、写本一冊。縦二一・〇センチ、横一五・〇センチ。袋綴じ。浅黄色布目表紙で、外題・内題はない。全二十一丁で、本文八行、和歌二行書きである。筆跡は定家様。先に触れた通り「寶曆十年秋 藤原忠晟」の奥書がある。「藤原忠晟」という人物については、今のところ未詳といわざるを得ない。

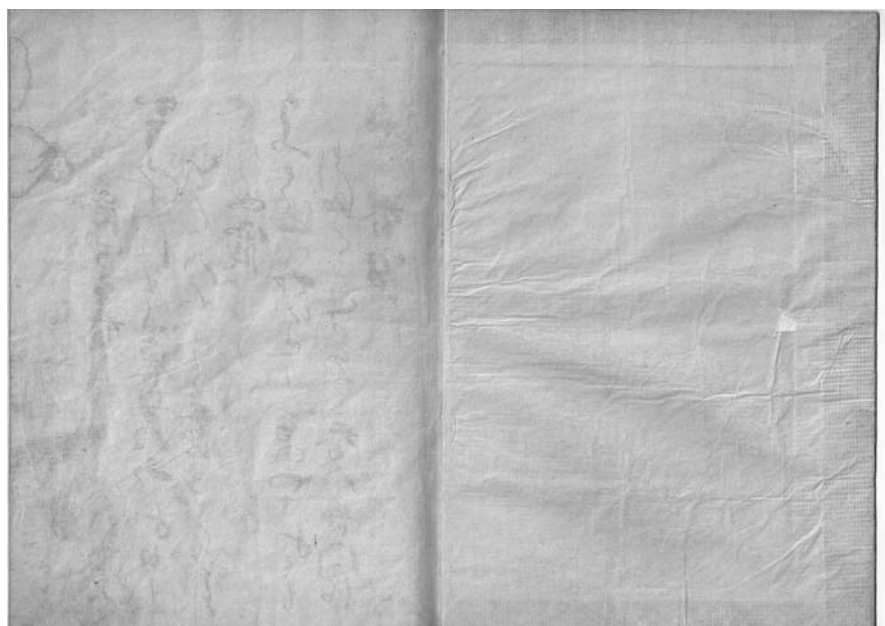
三 影印と翻刻

本節では、まず本書の影印を挙げ、次に翻刻を記す。翻刻本文には、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、歌頭に歌番号を付す。また、半丁ごとにかぎ括弧と丁数、表・裏の別を示す。



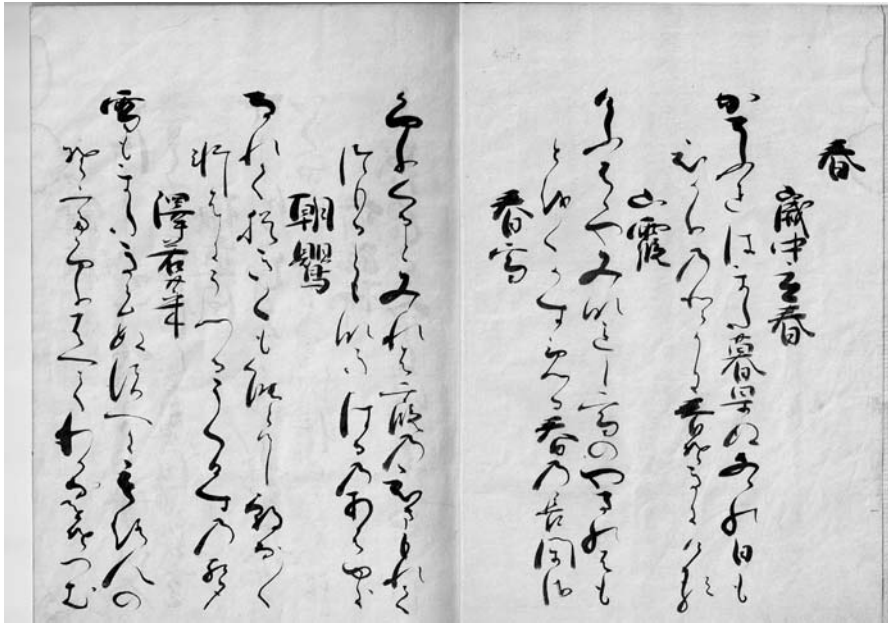
【影印】

(表紙)



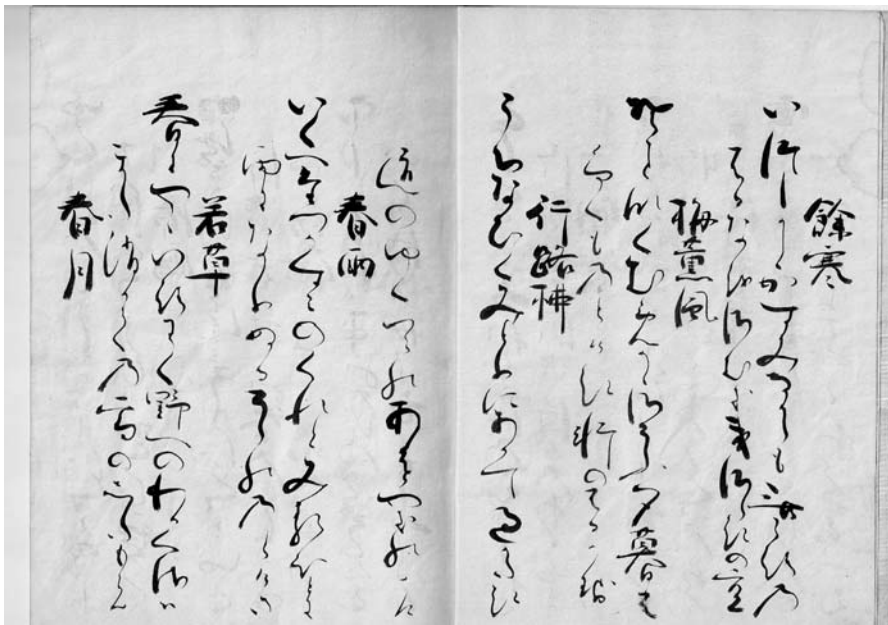
(表紙裏)

(二丁表)



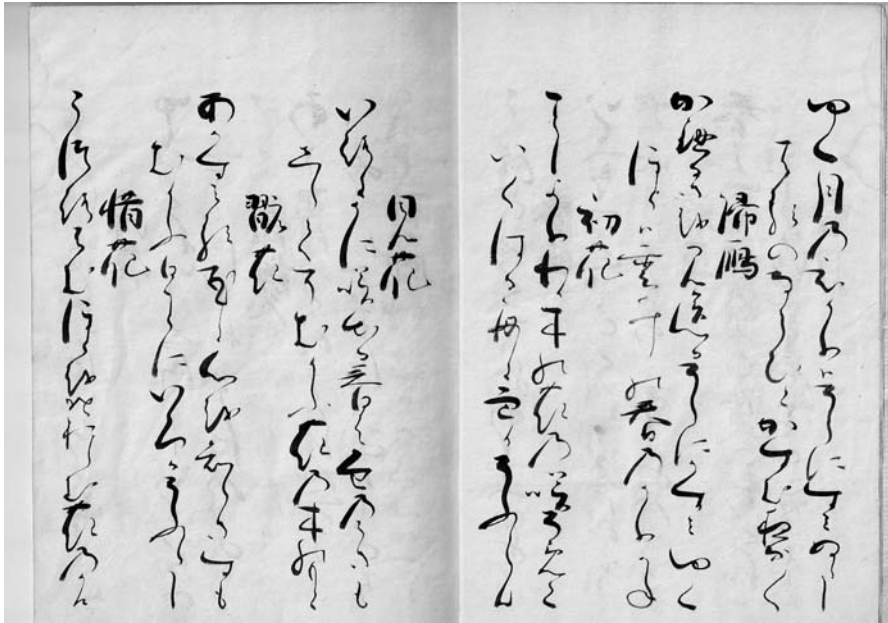
(二丁裏)

(二丁表)



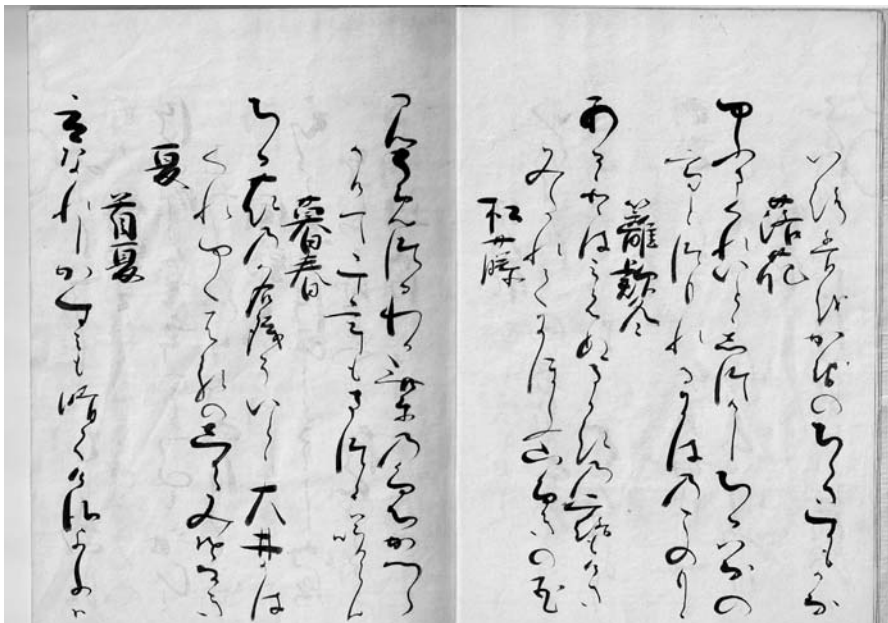
(二丁裏)

(二丁表)



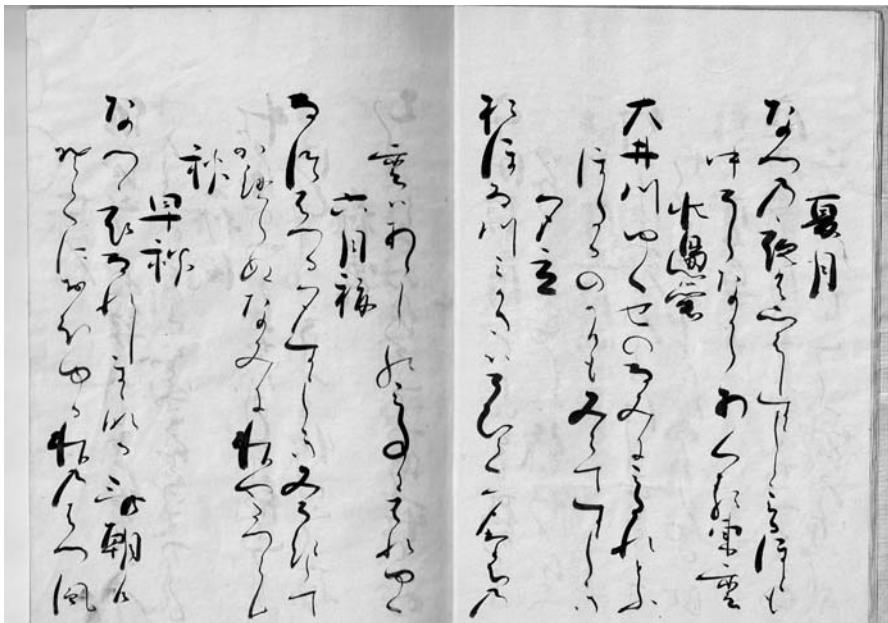
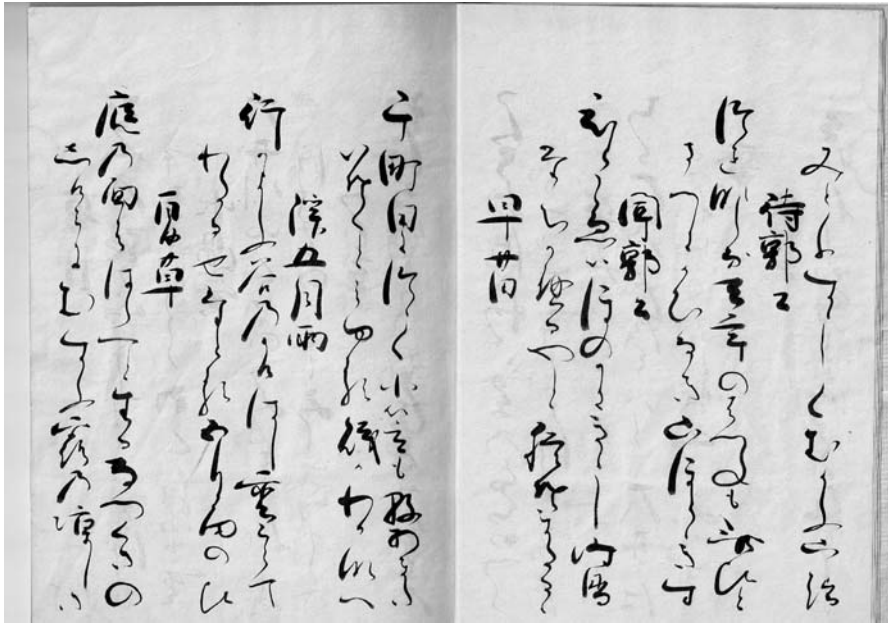
(四丁表)

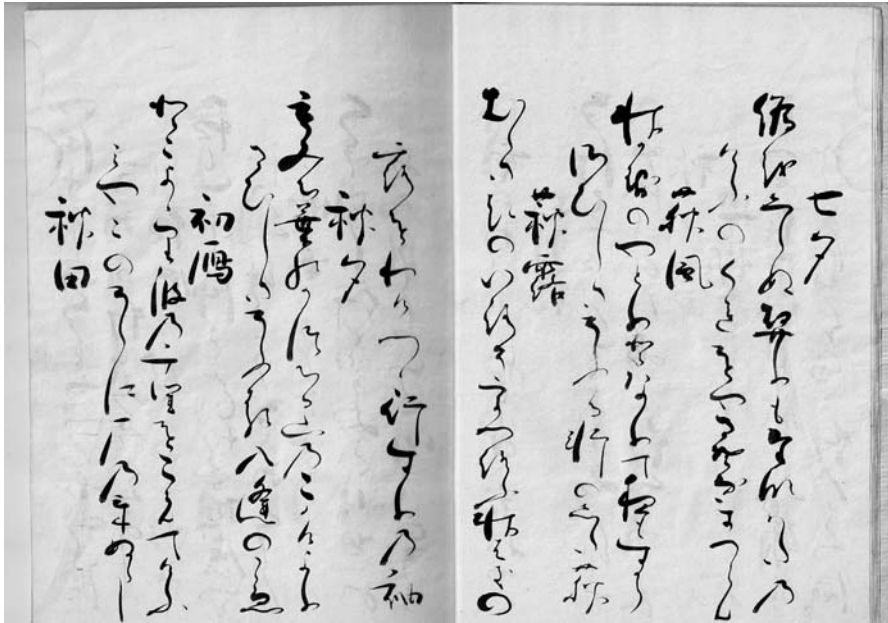
(三丁裏)



(五丁表)

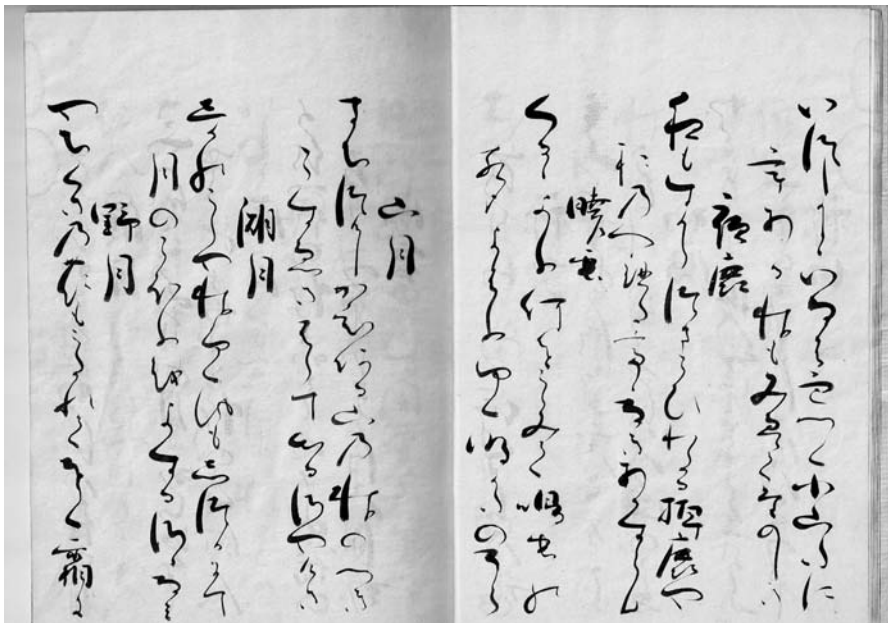
(四丁裏)





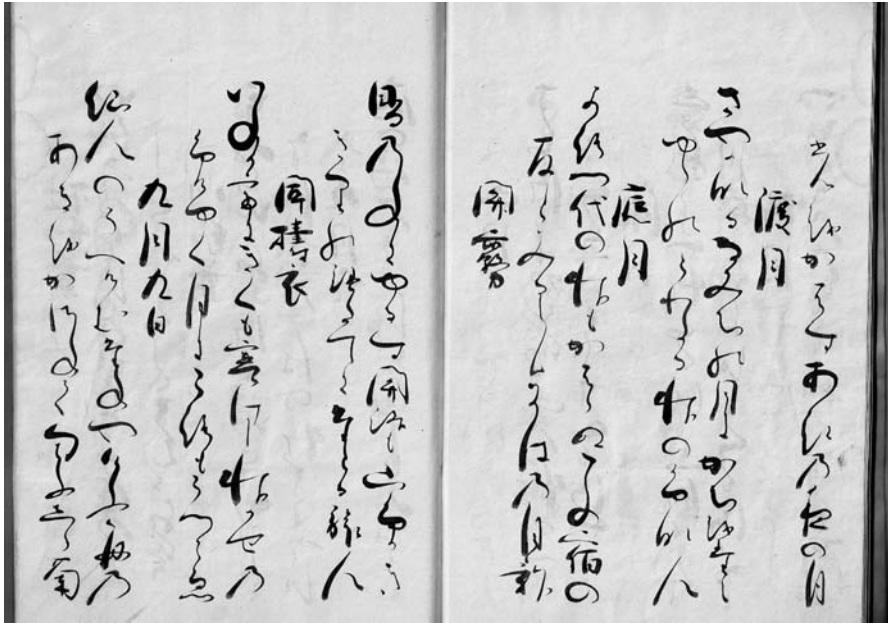
(七丁裏)

(八丁表)



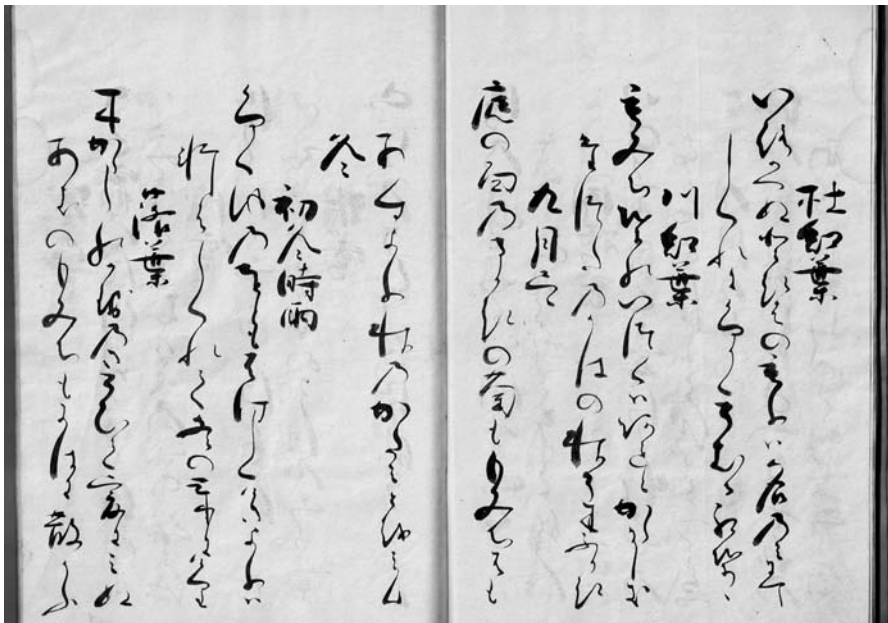
(八丁裏)

(九丁表)



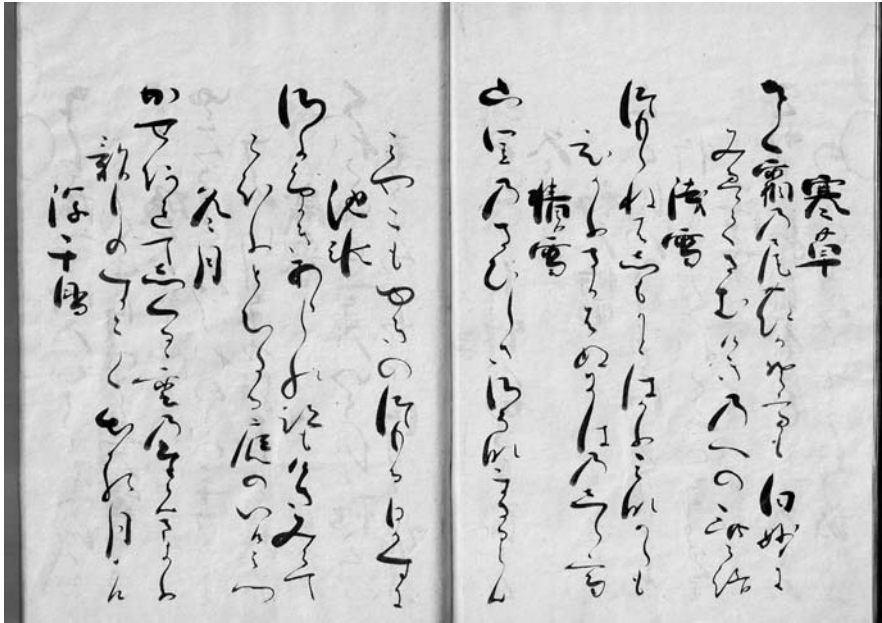
(九丁裏)

(一〇丁表)



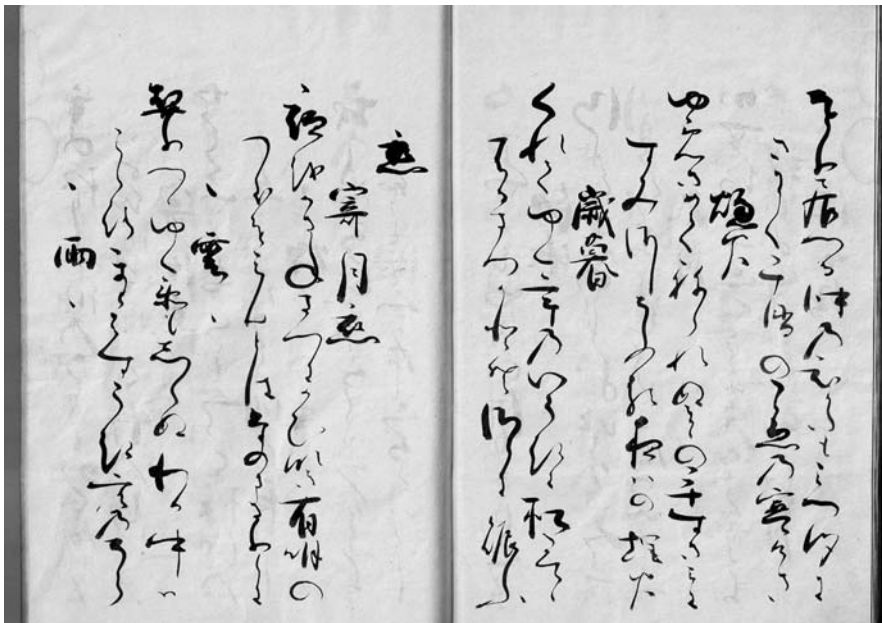
(一〇丁裏)

(一一丁表)



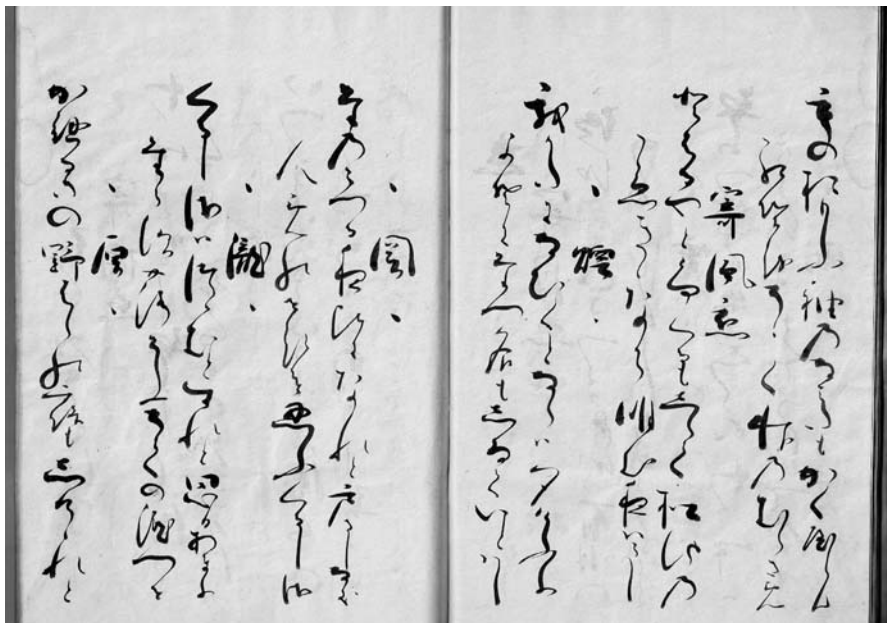
(一一二裏)

(一一二表)



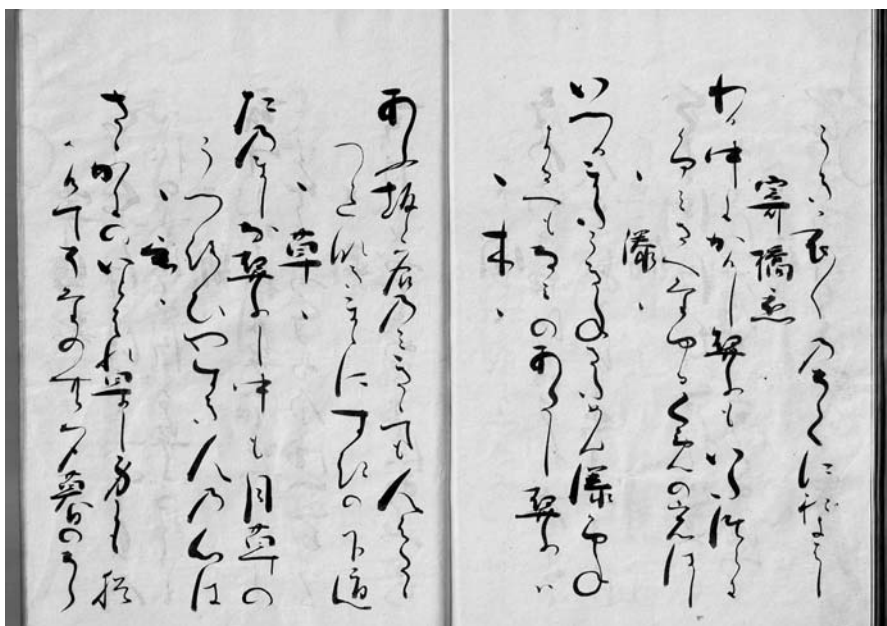
(一一三裏)

(一一三表)



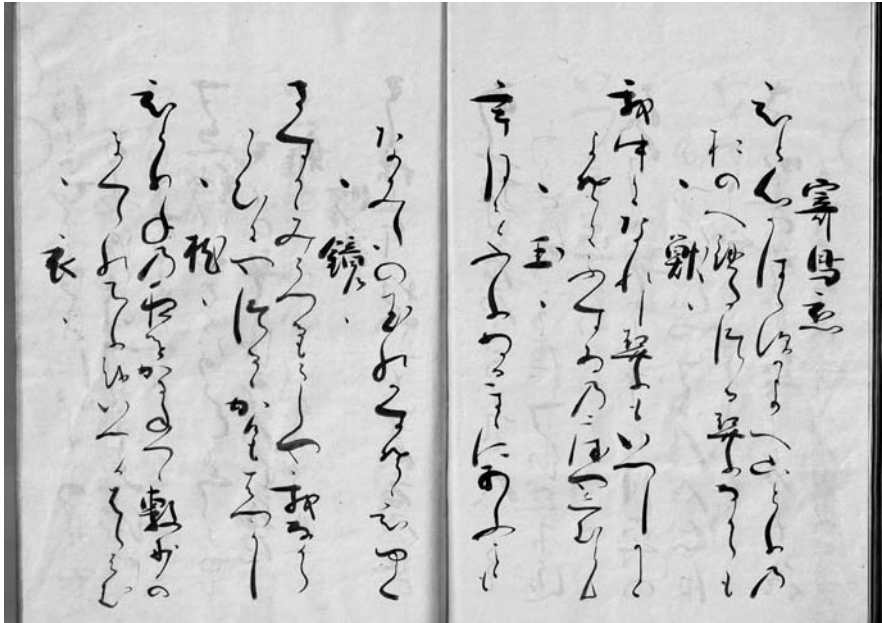
(一三丁裏)

(一四丁表)



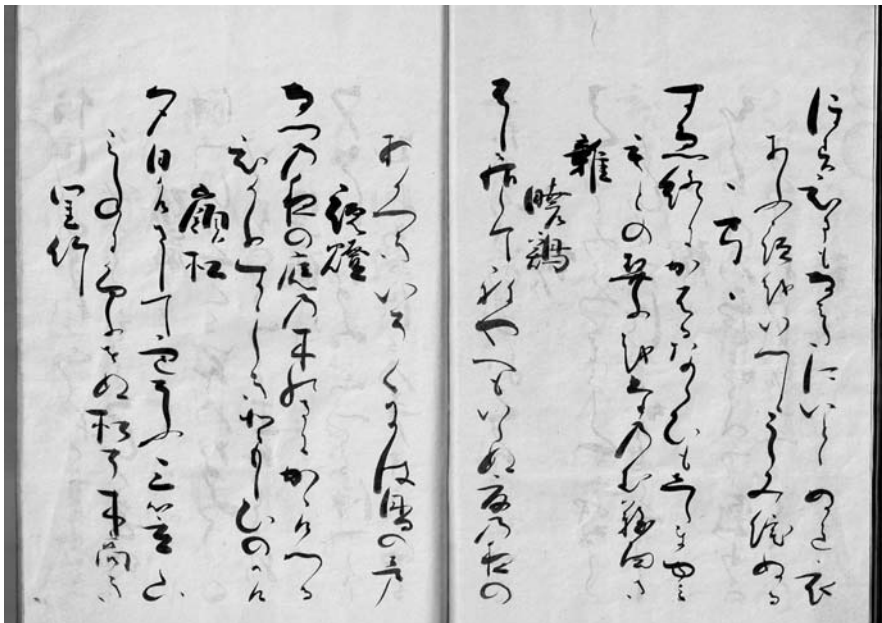
(一四丁裏)

(一五丁表)



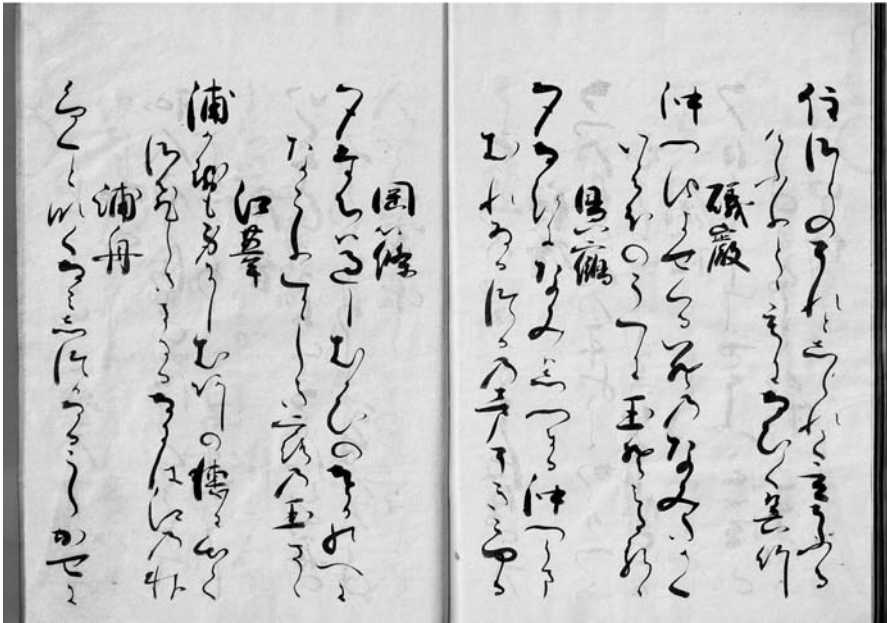
(一五丁裏)

(一六丁表)



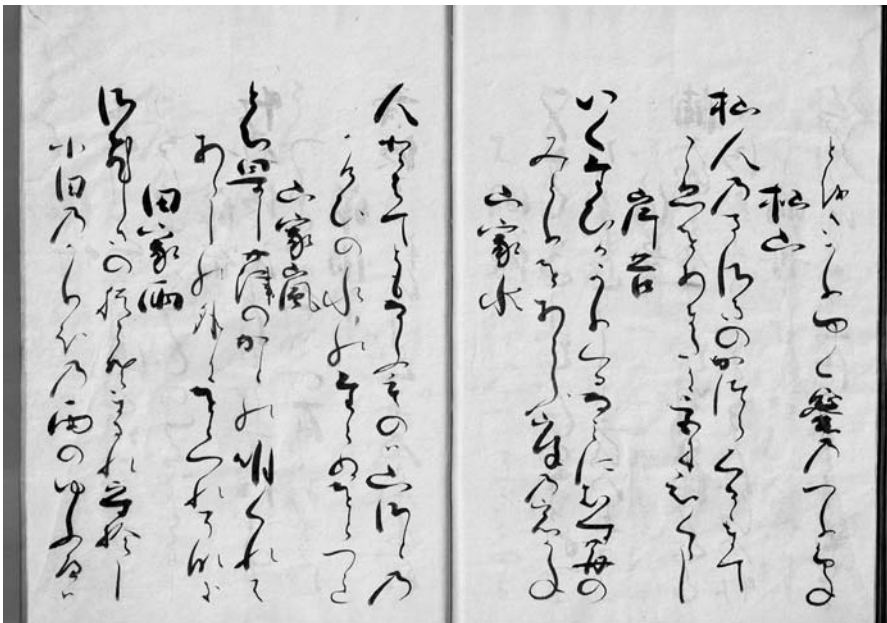
(一六丁裏)

(一七丁表)



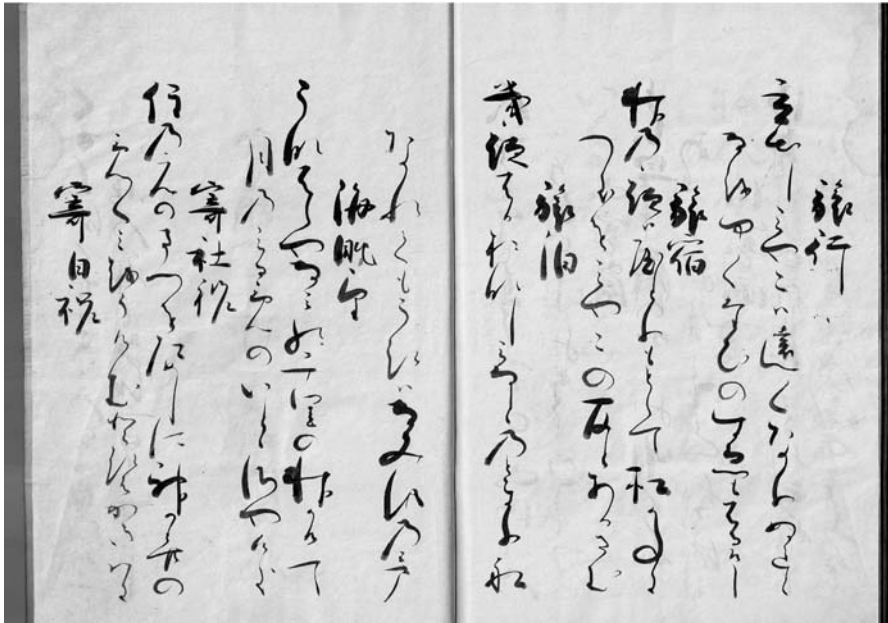
(一七丁裏)

(一八丁表)



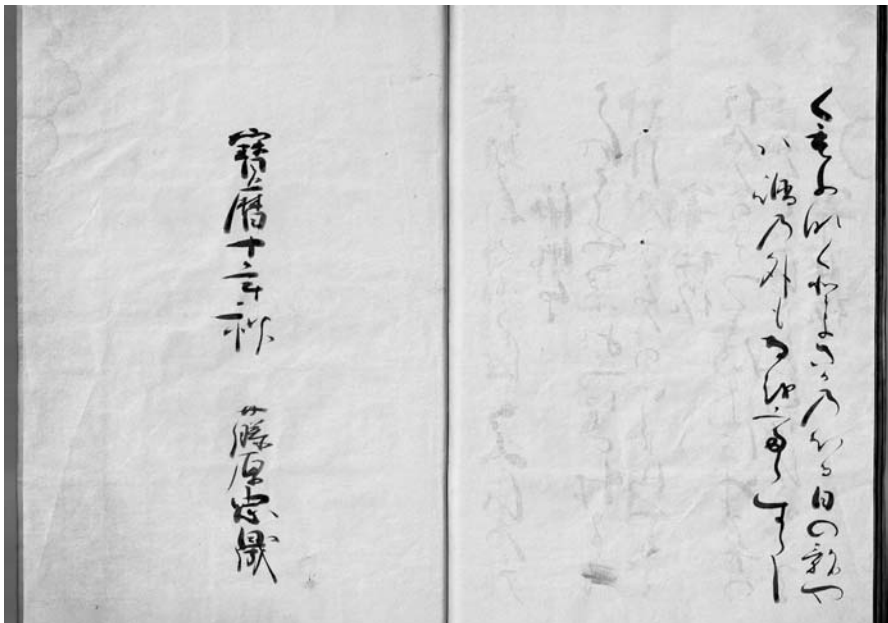
(一八丁裏)

(一九丁表)



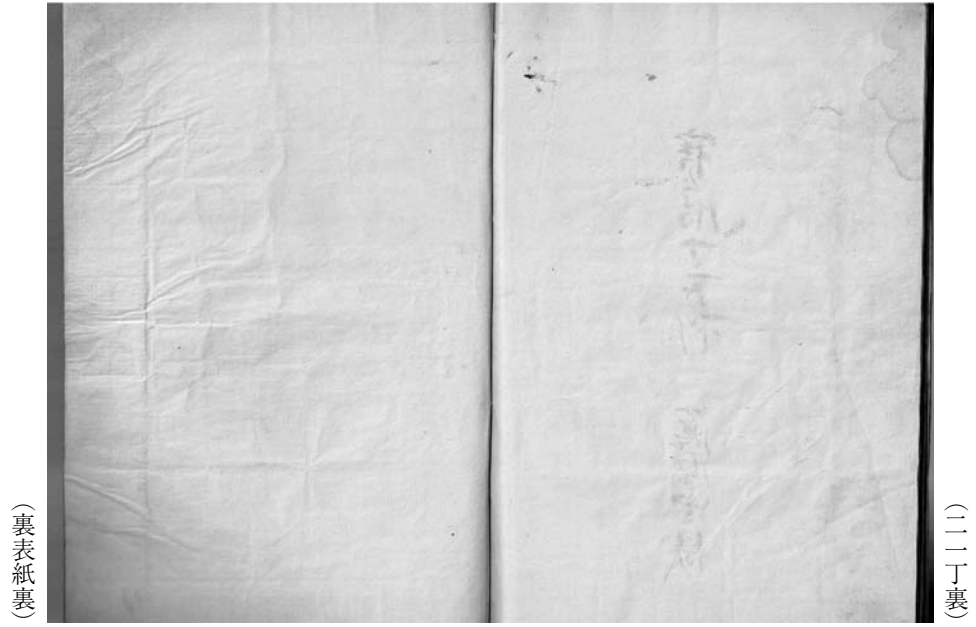
(一九九裏)

(二〇〇表)



(二〇〇裏)

(二〇一表)



(裏表紙裏)

(二一丁裏)



(裏表紙)

【翻刻】

春

歳中立春

一 かそふれはまた暮果ぬ冬の日も ひかりのとかに春そ
きにける

山霞

二 けふは、やみなれし雪のやまのはも とをくかすめる
春の長閑さ

春雪」一丁ウ

三 ふりくるとみれは霞のひまもれて つもるともなきは
るのあはゆき

朝鶯

四 なれて猶きくものとけし朝なく 軒はにうつるうくひ
すの聲

澤若菜

五 雪もまたきえぬ沢へにもろ人の そてふりはへてわか
なをそつむ」二丁オ

餘寒

六 いつしかとかすみなからも此ころの はるなをさむき
ささらきの空

梅薫風

七 そことなくむめか、さそふ夕暮は ふくものとけき軒
のはるかせ

行路柳

八 うちなひくみとりにあかて過かたき」三丁ウ 道のゆく
てのをやきのかけ

春雨

九 いくへたつかすみのかれとみるほどに 雨になりぬる
そらのとけさ

若草

一〇 春にや、いろわく野へのわかくさは また消かての雪
のしたもえ

春月」三丁オ

一一 ゆく月のひかりはそらにすみぬらし はるのならひと
かすむ夜なく

帰鷹

一二 かへるさを見送るそらにかすみゆく ほとは雲井の春
のかりかね

初花

一三 ことしよりわか木の花の咲そめて いくはる毎に色か
そふらん」三丁ウ

見花

- 一四 いろにかに咲出る春は世のうさも しらてそむかふ花
の木のもと
- 一五 あかすみる花に心を知らさすも むかふ日ことにいろ
かそふらし
- 惜花
- 一六 うつろはむほとをそおしむ花のかけ」四丁オ いろ香を
かせのちらさすもかな
- 落花
- 一七 ゆふまくれいと、しつけしちるはなの 雪とつもれる
にはのこのもと
- 籬款冬
- 一八 ある、とはみえぬまかきの露もけさ みたれてにほふ
山ふきの花
- 松藤」四丁ウ
- 一九 見そめつるわか紫のふちかつら かけて千年もまつに
咲らん
- 暮春
- 二〇 ちる花の名残そいと、大井かは くれゆくはるのしか
らみそなき
- 夏
- 二一 立なれしかすみも晴てけさよりは」五丁オ みとりす、
しくむかふ山端
- 待郭公
- 二二 つれなしな去年のはつねも此比と まつにかひなき山
ほと、きす
- 聞郭公
- 二三 ひとこゑはほのかにき、し時鳥 たちかへるやと猶そ
またる、
- 早苗」五丁ウ
- 二四 千町田につ、く小笠も数あまた いそくとみゆる賤か
わかなへ
- 溪五月雨
- 二五 行かよふ谷のかけはし雲とみて わたるせたとる五月
雨の比
- 夏草
- 二六 庭の面ははらへと生るなつくさの しけみにむすふ露
の涼しさ」六丁オ
- 夏月
- 二七 なつの夜はしはしす、しとみるほとも 中そらなから
あくる東雲

水邊螢

二八 大井川ゆくせのなみにみたれとふ ほたるのかけもみ
えてす、しき

夕立

二九 おほる川みかさはそひて夕たちの」六丁ウ 雲はあらし
のみねにはれゆく

六月祓

三〇 なつはつる夕す、しきみそきして かへらぬなみに秋
やたつらん

秋

早秋

三一 なつ衣なれしまゝなる此朝け そてにおほゆる秋のは
つ風」七丁オ

七夕

三二 偽をしらぬ契りもたなはたの けふのくれをやさそな
まつらん

萩風

三三 秋かせのやとりとなりて夜もすから さひしさそふる
軒のした萩

萩露

三四 むらさきのいろそうつろふ秋はきの」七丁ウ 露をわけ

つ、行すりの袖

三五 もみち葉のかつちる山のこかけより さひしさそふる
入逢のこゑ

初鴈

三六 とこよ、り波の千里をこえてけふ みやこのそらに厂
の来ぬらし

秋田」八丁オ

三七 いつしかといなは色つく小山たに 年ある秋もみえて
たのしき

夜鹿

夜鹿

三八 夜もすからつまこひわたる棹鹿や おのへへたて、な
きあかすらん

暁虫

三九 くる、より何をうらみて鳴虫の 聲よはりゆく明かた
のそら」八丁ウ

山月

四〇 まちつけしかひある山の秋のつき こすゑさはらて出
るさやけさ

湖月

四一 しかのうらや秋ふく風もしつかにて 月のこほりをよ

するさゝなみ

野月

四二 やちくさの花もみたれてをく霜に」九丁オ 光をかはす

あきの夜の月

渡月

四三 さやかなるなみちの月にかちをたえ ゆらのとわたる

秋のふな人

庭月

四四 よろつ代の秋もかはらぬこの宿の 友とみるらんには

の月影

関霧」九丁ウ

四五 鳥のねにゆるす関路も山ふかき きりのへたてにたと

る旅人

聞擣衣

四六 いねかてにきくも寒けし秋かせの ふけゆく月にころ

もうつこゑ

九月九日

四七 仙人のうへけむたねやけふ毎の あきをかさねて匂ふ

しら菊」一〇丁オ

杜紅葉

四八 いろかへぬときはのもりは名のみにて しくれにふか

くそむる紅葉、

川紅葉

四九 もみち葉のいつくはあれとからにしき たつたのかは

の秋そ木ふかき

九月尽

五〇 庭の面のまかきの菊もみちはも」一〇丁ウ あすより

秋のかたみとをみん

冬

初冬時雨

五一 ふく風のをともはけしくけさよりは 軒はしくれて冬

の来にけり

落葉

五二 木からしのかせのさそひて爰にみぬ あきのみちも

にはに散かふ」二二丁オ

寒草

五三 をく霜の尾花かそても白妙に みえてさむけきのへの

此ころ

浅雪

五四 つもらねはしもかとはかりみながらも ひかりまかは

ぬにはのしら雪

積雪

- 五五 山里のさひしささそなまさるらん」一二丁ウ みやこも
ゆきのつもる日かすに
- 池水
- 五六 さよふかきあらしの跡もけさみえて こほりとちたる
庭のいけみつ
- 冬月
- 五七 かせあれてしくる、雲のたえまより 影ものすこく出
る月かけ
- 「渴千鳥」一二丁オ
- 五八 をり居つる沖のひかたもみつ汐に さわく千鳥のこゑ
の寒けさ
- 爐火
- 五九 ゆめさめてねられぬまゝの手すすみに すみさしそふ
る夜はの埋火
- 歳暮
- 六〇 くれてゆく年のいそきに松たて、 はるまつかとそさ
らに賑ふ」一二丁ウ
- 恋
- 寄月恋
- 六一 夜をかさねまつにかひなき有明の つきをみんとはた
のまさりしに
- 六二 契りつ、ゆくゑもしらぬわか中は こゝろまとはすう
き雲のそら
- ゝ雲、
- ゝ雨、」一二丁オ
- 六三 ものおもふ袖のなみたもかくやらん 紅葉をそゝく秋
のむらさめ
- 寄風恋
- 六四 とはるやとふくるもしらて松風の こゑき、なから明
む夜はうし
- ゝ煙、
- 六五 我かたになひくとならば夕けふり よそにたつ名もし
ゐていとほし」一二丁ウ
- ゝ関、
- 六六 たのみつる夜比になれと戸さしなき 人めのせきを忍
ぶくるしさ
- ゝ瀧、
- 六七 くるしさはつ、むとすれと思ひあまり たえず落そふ
そでの瀧つせ
- ゝ原、
- 六八 かへるさの野はらの露もしけ、れと」一四丁オ うき衣
ゝのそてにおよはし

寄橋恋

- 六九 わか中にかけし契りもいたつらに ふみさへたゆるく
 めの岩はし
 、湊、
- 七〇 いつかまたうきねさためん湊ふね よるへもなみのあ
 たし契りは
 、木、
 「一四丁ウ」
- 七一 あふ坂と名のみき、ても人はた、 つれなきま、にす
 きの下道
 、草、
- 七二 たのましな契りし中も月草の うつろひやすき人の心
 は
 、虫、
- 七三 さ、かにのいとはれ果し身にも猶 かけてそたのむ夕
 暮のそら」
 「一五丁オ」
- 寄鳥恋
- 七四 ひと心かはらすかよへ山とりの おのへへたつる契り
 なからも
 、獣、
- 七五 我中になれし契りもいつしかと よそにふすゐの床や
 しむらん
- 七六 年月をふりぬるま、にあふことも」
 「一五丁ウ」
 なみたの
 玉のかすそ、ひゆく
 、鏡、
- 七七 ますか、みうつるもうしや我なから こひにやつる、
 かけもはつかし
 、枕、
- 七八 ひとりねの夜をかさねつ、敷妙の まくらのちりをい
 つかはらはむ
 、衣、
 「一六丁オ」
- 七九 ほすひまもなみたにいと、ぬれ衣 あふ夜をいつとう
 らみ侘ぬる
 、弓、
- 八〇 す糸終にかはるならひもしらまゆみ もとの契りをた
 のむ難面さ
 雑
- 暁鶏
- 八一 はし居してねやへもいらぬ夏の夜の」
 「一六丁ウ」
 あかつ
 きいそくには鳥の声
 夜燈
- 八二 なつの夜の庭の木のまにか、けつる ひかりす、しき

ともしひのかけ

嶺松

八三 夕日かけさして色そふ三笠山 みねにふりせぬ松そ木

高き

里竹「一七丁オ

八四 住さとのそれとしられて立そふる けふりと、もにな

ひく呉竹

磯巖

八五 沖つ風よせくるいそのなみたかく いはほのうへに玉

そみたる、

鳥鶴

八六 夕なきになみはしつまる沖つしま むれゐるつるの声

そきこゆる「一七丁ウ

岡篠

八七 夕たちは過しむかひのをかのへに なこりす、しき露

の玉さ、

江葦

八八 浦かせも身にしむあしの穂に出て さひしさまさるな

には江の秋

浦舟

八九 ふくとなくなみしつかなるうらかせに「一八丁オ とを

さかりゆく蟹のつりふね

柚山

九〇 柚人のまさきのかつらくる、まで こゑをあまたに宮

木ひくらし

岸苔

九一 いくたひかよりくるなみにむす莓の みとりをあらふ

岸の岩かね

山家水「一八丁ウ

九二 人とはとてもなふものは山さとの かけひの水のたえ

ぬをとつれ

山家嵐

九三 とち果し葎のかとの明くれは あらしの外にをとつれ

そなき

田家雨

九四 さひしさの猶とをまされ守捨し 小田のかりほの雨の

ゆふへは「一九丁オ

旅行

九五 立出しみやこは遠くなりぬれと なをゆくたひのすゑ

もはるけし

旅宿

九六 秋の夜はやとりもとらて松かねに つきをみやこの友

とあかさむ

旅泊

九七 幾夜はかおなしみなとのとまり船一九丁ウ なれても

うきはなみ風の声

海眺望

九八 うなはらやなみの千里の秋かけて 月のみるめとい

と、さやけき

寄社祝

九九 住のえのまつをためしに神かきの めくみをうけむと

きはかきはに

寄日祝二〇丁オ

一〇〇 くもりなくとよさかのほる日の影や 八嶋の外もなを

てらすらし

(六行分空白)

「二〇丁ウ

(三行分空白)

寶曆十年秋 藤原忠晟

(四行分空白)

「二二丁オ

(空白)

「二二丁ウ

四 解題

本稿冒頭で述べたとおり、本百首歌の題は、ほぼ宝治百首に
拠っている。いま、宝治百首題を具体的に列挙しながら、本百
首の題と異なるものは で囲み、その後には本百首の題を
() で括弧して示す。以下、宝治百首の引用は、『新編国歌大
観』に拠る。

題

春廿首

歳内立春 山霞 春雪 朝鶯 沢若菜 余寒

梅薫風 行路柳 春雨 若草 春月 帰雁

初花 見花 翫花 惜花 落花 籬款冬

松上藤 (松藤) 暮春

夏十首

首夏 待郭公 聞郭公 早苗 溪五月雨 夏草

夏月 水辺螢 夕立 六月祓

秋廿首

早秋 乞巧奠 (七夕) 萩風 萩露 秋夕

初雁 秋田 夜鹿 暁虫 山月 湖月 野月

渡月 庭月 関霧 聞擣衣 **重陽宴** (九月九日)

杜紅葉 河紅葉 九月尽

冬十首

初冬時雨 落葉 寒草 浅雪 積雪 池水

豊明節会 (ナシ) 冬月 湯千鳥 (爐火) 歳暮

恋廿首

寄月恋 寄雲恋 寄雨恋 寄風恋 寄煙恋 寄

関恋 寄滝恋 寄原恋寄橋恋 寄湊恋 寄木恋

寄草恋 寄虫恋 寄鳥恋 寄獸恋 寄玉恋 寄

鏡恋 寄枕恋 寄衣恋 寄弓恋

雑廿首

暁鷄 夜灯 嶺松 里竹 礮巖 烏鶴 岡篠

江葦 浦船 柚山 岸苔 山家水 山家風

田家雨 旅行 旅宿 旅泊 海眺望 寄社祝

寄日祝

百首の構成は、「春廿首」「夏十首」「秋廿首」「冬十首」「恋廿首」「雑廿首」であり、計百首となる。「春廿首」内の「松上藤」を「松藤」とするのは、あるいは「上」を脱したかとも考へ得るが、より目を引くのは、「乞巧奠」が「七夕」に、「重陽

宴」が「九月九日」になっていることであろう。これらには、宮中節会を指す語を、民間行事に言い換えるという方向性が見出されよう。また、「豊明節会」がないという点も、この宮中節会が、民間には馴染みが少なかったことによるものか。なお、本百首では、「冬十首」に「豊明節会」を欠く代わりに、「湯千鳥」の後に、宝治百首題にはない「炉火」の題が存する。「炉火」は、百首歌においては、つとに堀河百首にも見出される題である。

本百首が宝治百首に抛るところは、題ばかりではない。歌についても、宝治百首の歌、とくに同題の歌との共通した表現が目につく(傍線筆者)。

朝鶯

なれて猶きくものとけし朝な／＼軒はにうつるうくひすの
聲 | (忠晟百首・四)

朝鶯

資季

はる風のさそひし日よりあさなあさななれてききつる鶯の
声 | (宝治百首・一三四)

澤若菜

雪もまたきえぬ沢へにもろ人のそてふりはへてわかかなをそ

つむ
(忠晟百首・五)

沢若菜
公相

諸人の袖ふりはへてけさよりや野沢の水にわかなつむらん

(宝治百首・一六九)

餘寒

いつしかとかすみなからも此ころのはるなをさむきささら

きの空
(忠晟百首・六)

余寒
道助

ぬきをうすみ春の衣の白妙に雪なほ寒しきさらぎの空

(宝治百首・二〇二)

帰鷹

かへるさを見送るそらにかすみゆくほとは雲井の春のかり

かね
(忠晟百首・一一二)

帰雁
為氏

帰るさを何いそぐらん人やりの道ならなくにはるのかり金

(宝治百首・四六三)

帰雁
為繼

とほざかる程は雲井の春のかりいまはこしちの空に鳴く

る
(宝治百首・四六六)

溪五月雨

行かよふ谷のかけはし雲とみてわたるせたとる五月雨の比

(忠晟百首・二五)

溪五月雨
基家

玉かづら谷のかけはし波こえてくる人たゆる五月雨のころ

(宝治百首・九六四)

溪五月雨
有教

五月雨に谷のかけはし水こえて嶺のふし木をかよふ山人

(宝治百首・九七六)

早秋

なつ衣なれしまゝなる此朝けそてにおほゆる秋のはつ風

(忠晟百首・三二一)

早秋
寂西

夏衣うすきがうへにうすきかとおほゆるけさの秋の初かせ

(宝治百首・一一二五)

渡月

さやかなるなみちの月にかちをたえゆらのとわたる秋のふ

(忠晟百首・四三三)

渡月
顕氏

な人

なるみがた波ちの月をながめつついそがで渡る秋の舟人

(宝治百首・一七〇〇)

、草、

たのましな契りし中も月草のうつろひやすき人の心は

(忠晟百首・七二)

寄草恋

高倉

月草のうつろひやすき心さへ我が涙にはつれなかりけり

(宝治百首・二八六九)

、枕、

ひとりねの夜をかさねつ、敷妙のまくらのちりをいつかは

らはむ

(忠晟百首・七八)

寄枕恋

禅信

しきたへの枕のちりをはらひつつただあらましのひとりね

の床

(宝治百首・三一〇八)

岡籬

夕たちは過しむかひのをかのへになこりす、しき露の玉

さ、

(忠晟百首・八七)

岡籬

為家

夕づくひさすやむかひの岡のべにみがくれわたる露の玉籬

(宝治百首・三四四五)

浦舟

ふくとなくなみしつかなるうらかせにとをさかりゆく蟬の

つりふね

(忠晟百首・八九)

浦船

御製 (後嵯峨院)

朝日さすかたの浦風しづかにてけふは出でそふあまのつり

船

(宝治百首・三五二八)

浦船

寂能

すみよしのちらぬ松吹くうらかぜにうかぶ木の葉のあまの

釣ぶね

(宝治百首・三五三九)

柚山

柚人のまさきのかつらくる、までこゑをあまたに宮木ひく

らし

(忠晟百首・九〇)

柚山

行家

宮木ひくまさきのつなをくりはへて立つ柚人のやすむまぞ

なき

(宝治百首・三五八五)

岸苔

いくたひかよりくるなみにむす毎のみとりをあらふ岸の岩
かね
(忠晟百首・九一)

岸苔 信覚

早き瀬の岸のいはねにむすこけの緑をあらふ山川の水
(宝治百首・三六〇八)

山家水

人とはとてもなふものは山さとのかけひの水のたえぬをと
つれ
(忠晟百首・九二)

山家水 隆親

さびしさをとふ人あらば山里のかけひの水の音をこたへん
(宝治百首・三六四四)

本百首の詠作にあたり、宝治百首の和歌を念頭に置いていたであらうことは、まず首肯されるであらう。宝治百首自体がそうであったように、本百首においても、既存の歌の表現を組み合わせた詠が目立つ。宝治百首以外でも、たとえば、「さやかなるなみちの月にかちをたえゆらのとわたる秋のふな人」(忠晟百首・秋・四三・渡月)の第三、四句が、『百人一首』曾祢好忠歌であることは言を俟つまい。忠晟百首の先行歌からの表現摂取のあり方については、稿を改めて論じたい。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九～二〇二一年度)、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二三年度)における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2と「竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器『CSA Ver.2.00』を使用した。

なお、本稿脱稿後、本書は、同志社大学文化情報学部文献室所蔵貴重書(請求番号:911.158=F10599、資料番号:206700037)として登録された。